

『徒然草』における「あはれ」の現れ方

—— 第1部・第2部の文体と擬古的側面 ——

安部 清哉・峰尾 みやび

1 はじめに——第1部と第2部とでの表現の相違と文体

『徒然草』はこれまでも様々な観点からの日本語学的研究がなされてきている。『徒然草』の日本語学的研究の課題としては、○中世前期の日本語、○和漢混交文、○和文体と和漢混交文の混在、○擬古文、○中世漢語、○主題（無常観、仏教思想など）と語彙や表現、○係り助詞・係り結び（その文体および個々の文章との関係）、○章段構成（章段と文体の相違、特に序段から第三二段までの前半部（第1部）と、それ以降の後半部（第2部））との文体的相違などがあげられる。しかし、日本語史の研究では、2000年以降、中世の一資料としては利用されるものの、個別の章段解釈などを別とすれば、一時期より研究は多くはなく、停滞している感があるのは否めない（研究史については、安部（2020.1）にて触れた）。

研究課題の一つにその中世的文体、あるいは、擬古文的文体の問題があり、いくつかの論文もあって個々の具体的な指摘もなされているが、まだ多くはなく、またその特徴の全体的な把握という点では十分な段階ではないように思われる。その理由はいくつか考えられるが、一つには、中古的な擬古的な要素（意図的な脚色としての）なのか、作者の個性からくる文体なのか、それもやや中古的要素を残す、当時としても古語的な表現を好む作者の好みからおのずと現れているいわばやや古風な表現・文章が混在することなのか、それとも中古と同じ語彙を使用する場合でも（「あはれ」「をかし」等）、その使い方や意味合いなど用法の微妙なところが中世的におのずと変質してしまっていて中古的用法とは見えないために、「擬古的」だと見えてしまっているだけなのか、というこれらの諸側面個々の峻別が、なかなか容易に区別できないことがらである、という側面もあるように思われる。

執筆者（安部）は、連語研究の試みの一つとして、『徒然草』の文末表現および接続表現を取り上げ、そのいわゆる第1部・第2部での意味・用法の相違を比較し、また、同じ所謂随筆とされるジャンルの中古の作品である『枕草子』の用法とも比較してみた（安部（2010.1）および安部（2020.5）参照）。連語的視点から見ること、語単独で見た用法、いわゆる品詞論的単位での語（語彙）を見ただけでは相違が気づけなかったような特徴の相違——第1部・第2部間の相違、『枕草子』と『徒然草』との相違——を

見出しやすいように思われた。

そこで、本稿でも連語の観点、連語的用法の現れ方に着目し、特に中古的ともいえる「あはれ」を取り上げ『徒然草』でのその使われ方を分析してみることにしたい。

(なお、資料の本文は旧・日本古典文学大系本(それに従った研究作業用電子データ版)を使用し、便宜上一部の表記を改めた。原文の表記を示す振り仮名部分も、問題がない部分では削除して漢字のみの表記にした場合がある。「あはれ」の表記なども影響ない限り、仮名か漢字表記か(「哀」等)などは不問としている。)

2 『徒然草』における「あはれ」と係り助詞との呼応

『徒然草』における「あはれ」は、いわゆる形容動詞の用法の「あはれ+なり」も副詞的用法の「あはれに」も、すべて名詞との連語用法とみなし、名詞として集計すると、31例になる(索引での感動詞3例、「もののあはれ」4例は今回含めていない)。その31例のうち、係り助詞と共起しているのは14例(45.2%、表2のグレー背景部分)である。

さらに、「あはれに」を含め「なり」を伴ういわゆる形容動詞の用法での使用は31例中22例(71.0%)。その22例のうち11例(50.0%)が係り結びと共起している。係り助詞と共起している形容動詞の用法の「あはれ」11例のうち、「あはれ+なり」ないしそれに接続する助動詞が直接係り結びをつくる例が9例、「あはれ」を間にはさんでその後に接続する表現が係り助詞を受ける例が2例ある。後者も、係り助詞による強調が「あはれ」にも影響していると考え、本稿では「間接呼応」2例として扱い、前者を「直接呼応」9例として区別して扱うことにする。

いずれにせよ「あはれ」31例は、係り助詞との共起14例(45.2%)として見ても、また、「あはれ+なり」の直接呼応9例(40.9%)あるいは共起(50.0%、11/22例)として見ても、係り助詞と共に表現しようとする意識が強いことがわかる。

一方、『徒然草』と同じ随筆である中古の『枕草子』を見ると、同じく「あはれ」83例、「なり」を伴う形容動詞の用法は76例(91.6%)である(索引での感動詞5例は今回は含めない)。そのうち係り結びと共起している例は76例中15例(19.7%)だけであった。係り結びが盛んであった中古の『枕草子』の方が2割に満たず、係り結びが既に徐々に衰退している中世の『徒然草』の「あはれ」の方が、係り結びと共起する割合が高くなっている(【表1】参照)。

しかも、係り助詞と共起する事例は、『徒然草』の後半の所謂第2部(第33段以降)よりも、和文的、擬古文的ともいわれる第1部の方に多く現れている。また、その「あはれ」の使い方も、第1部と第2部とで微妙な相違を見せている。

本稿では、『徒然草』における「あはれ」と係り助詞との共起を、「あはれ」の連語的用法ととらえなおし、『枕草子』の用法との比較、第1部と第2部との比較を行いながら、

【表1】『徒然草』『枕草子』における「あはれ」の用法と使用度数

11/22(50.0)間接を含む【直接呼応 9/22(41.0)】

	『徒然草』 (%)	『枕草子』 (%)
あはれ	31	83
あはれ+なり／あはれ 例中	22/31(70.1)	76/83(91.6)
あはれ+なり用法の比率	70.1% <	91.6%
係り助詞との共起／形容動詞的用法中	11/22(50.0)間接を含む 【直接呼応 9/22(40.9)】	15/76(19.7)
係り助詞共起用法の比率	50.0% >	19.7%

* 係り結びとして「何かは」との呼応1例があるが(第21段「～あはれならざらん」)、係り助詞との呼応例数としてはここでは除外しておく。

【表2】『徒然草』の「あはれ」の分布章段と係り助詞

連番	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
章段	11	13	13	14	14	14	19	19	19
形動	○	○	○	○		○	○		○
係助詞						(こそ)	こそ	(こそ)	

連番	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
章段	19	19	19	19	21	21	21	25	25
形動	○	○	○	○	○	○	○	○	○
係助詞	ぞ	(ぞ)	こそ~しか	こそ	こそ		こそ~しか	こそ	ぞ

連番	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗
章段	26	28	29	30	30	32	44	125	137
形動		○	○			○			○
係助詞									

第33段以降(㉕番以下)が第2部

連番	㉘	㉙	㉚	㉛
章段	137	137	142	240
形動	○	○		
係助詞		こそ	(こそ)	(こそ)

* 二重縦線は章段の区切り。

* グレー背景は「あはれ+なり」が係り助詞と呼応する例。「形動」は形容動詞的用法。

* カッコ付きの(こそ)(ぞ)は係り助詞が名詞「あはれ」、「あはれ+なり」と共起する5例(「間接呼応」とした2例を含む)。

中古の用法とも異なる『徒然草』内部での使い分けを、文体と章段構成との観点から考察してみることにしたい。

3 『徒然草』の「あはれ」の分布と使われ方

まず、『徒然草』の「あはれ」31例の用法について、使用される章段、「なり」を伴う形容動詞的用法、係り結びとの共起（連語的用法）を整理してみたものが【表2】である。連番は後掲の用例番号と対応している。

【表2】を見ると、「あはれ」31例のうち、24例（77.4%）が第1部に偏っていることが分かる。また、形容動詞的用法の22例も19例（86.4%）が第1部に偏る。さらに、係り結びと共起する例も、同じように11例中10例（90.9%）がやはり第1部に集中し偏っている（グレー網かけ部分）。特に、中世には衰退が進むとされる係助詞「ぞ」との共起例（3例）に関しては第1部にしか見られない。

その係り助詞「ぞ」の使用である「ぞ～あはれなる」3例は、「ぞ」との呼応例が見られる同じ章段には、係り助詞との呼応が「ぞ」のみ1種類だけで現れることはなく、

【表3】 章段毎の用例数と『枕草子』の影響した章段

章 段	例 数
11	1
13	2
14	3
19 (枕)	7
21 (枕)	3
25	2
26	1
28	1
29	1
30	2
32 (枕)	1
44	1
125	1
137 自然	3
142	1
240 (枕)	1

(枕)は『枕草子』の影響があるとされる章段（三田村1974）

必ず「こそ」との呼応になる「こそ～あはれなれ」も使われるという特徴がある（第十九段では「こそ」4例+「ぞ」2例、第二十五段「こそ」1例+「ぞ」1例）。「こそ」がより後代まで残り、「ぞ」の方が先に衰退を見せるが、「ぞ」は、「こそ」も現れるような、また、係り結びの使用が頻出するような中古的文章・文体、そのような使用意識が強い章段にしか現れていない、ともいえようか。

「あはれ」は同じ章段に複数使用される場合がある。【表3】は「あはれ」31例の章段ごとの合計数である。第1部は第2部に比べて合計使用数も多いが、各1章段単位での複数使用という点でも、第1部は複数使用される章段が多い。第十九段は7例と多用されているが、第十九段は四季折々の風物の情趣について述べていること、また、比較的長い章段であることが影響して、使用数が多くなっていると考えられる。この段は『枕草子』の影響が最も大きい章段の1つとされていることも（三田村雅子（1974）関係していよう。例外的なものが第百三十七段であるが、これについては後に詳しく述べる。

次に、『徒然草』の「あはれ」の典型的な事例、および、『枕草子』の影響を受けたとも見える事例、係り助詞との呼応例、複数の例がある章段を中心に、いくつか挙げておく（第十三、十四、十九、二十一、二十六、二十九、三十、百三十七、二百四十段）。そのひとつは章段全体の主題になっていると考えられる事例（第十三段等）、いまひとつは、章段冒頭部、あるいは、章段末尾近くに現れる事例（第十九段）である（丸印○数字は「あはれ」の例の通し番号）。後者は、安部（2020.1）での連語の考察において、主題にも関わる特徴的表現が章段末尾部か冒頭に現れる傾向があることを指摘したが、そのような特徴を考慮した選別である。

第1部

○【第十三段】計2例（主題および末尾部）

ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなくさむわぎなる。

文は、文選の②あはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。

この國の博士どもの書ける物も、いにしへのは、③あはれなる事多かり。

○【第十四段】計3例（主題、末尾部、こそ呼応）

和歌こそ、なほをかきものなれ。

あやしのしづ・山がつのしわざも、いひ出つればおもしろく、おそろしき猪のしゝも、「ふす猪の床」といへば、やさしくなりぬ。この比の歌は、一ふしをかしく言ひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、ことばの外に、④あはれに、けしき覺ゆるはなし。【中略】

今も詠みあへる同じ詞・歌枕も、昔の人の詠めるは、さらに同じものにあらず。やす

くすなほにして、姿もきよげに、⑤あはれも深くみゆ。

梁塵秘抄の郢曲の言葉こそ、また、⑥あはれなる事は多かめれ。【間接呼応の例】
昔の人は、たゞいかに言ひすてたることくさも、皆いみじく聞ゆるにや。

○【第十九段】計7例（主題、末尾部、共に、こそ呼応）

折節の移りかはるこそ、ものごとに⑦哀なれ。

「もののあはれは秋こそまされ」と、人ごとに言ふめれど、それもさるものにて、今
一きは心も浮きたつものは、春の氣色にこそあめれ。【中略】

この比都にはなきを、東のかたには、なほする事にてありしこそ、⑩あはれなりしか。

かくて明ゆく空の氣色、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞ
する。大路のさま、松立わたして、花やかにうれしげなるこそ、また⑬あはれなれ。

○【第二十一段】計3例（主題、冒頭部こそ呼応、および、末尾近くでもこそ呼応）

萬のことは、月見るにこそ、慰むものなれ。

ある人の、「月ばかり面白ものはあらじ」と言ひしに、またひとり、「露こそ⑭あはれな
れ」とあらそひしこそ、をかしけれ。折にふれば、何かは⑮あはれならざらん。

月・花はさらなり、風のみこそ、人に心はつくめれ。岩にくだけて清く流るゝ水のけ
しきこそ、時をもわかずめでたけれ。

「沉・湘日夜東に流去る。愁人の為にとゞまること少時もせず」といへる詩を見侍し
こそ、⑯哀なりしか。涪康も、「山澤にあそびて、魚鳥を見れば心たのしぶ」と言へり。

人どほく、水草清き所にさまよひありきたるばかり、心なぐさむ事はあらじ。

○【第二十六段】1例（主題、冒頭部）

風も吹あへずうつろふ人の心の花に、なれにし年月を思へば、⑰あはれと聞しことの
葉ごとに忘れぬものから、我世の外になりゆくならひこそ、亡き人のわかれよりもまさ
りてかなしきものなれ。【後略】

○【第二十九段】1例（主題、末尾部）

しづかに思へば、よろづに過にしかたの戀しさのみぞせんかたなき。【中略】

この比ある人の文だに、久しく成て、いかなる折、いつの年なりけんと思ふは、⑱哀
なるぞかし。

手なれし具足なども、心もなくて變らず久しき、いと悲し。

○【第三十段】計2例（主題、末尾部）

人の亡きあとばかり悲しきはなし。【中略】

思ひ出でてしのぶ人あらんほどこそあらめ、そもまたほどなくうせて、聞つたふるばかりの末々は、㉔哀とやは思ふ。さるは、跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらん人は㉕あはれと見るべきを、はては、嵐にむせびし松も千年をまたで薪にくだかれ、古墳はすかれて田となりぬ。その形だになくなりぬぞ悲しき。

第2部

○【第百三十七段】計3例（主題、冒頭部ほか）

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行衛知らぬも、なほ㉖哀に情ふかし。【中略】

望月のくまなきを千里の外まで眺めたるよりも、暁ちかくなりて待出でたるが、いと心ぶかう、青みたるやうにて、ふかき山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたる村雲がくれのほど、またなく㉗哀なり。【中略】

暮るほどには、立て並べつる車ども、所なく並みみつる人も、いづかたへか行きつらん、ほどなく稀に成て、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾、壘も取り拂ひ、目の前にさびしげになりゆくこそ、世の例も思ひ知られて、㉘哀なれ。

大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。【後略】

○【第二百四十段】1例（主題、冒頭部）

しのぶの浦の蟹の見るめも所せく、くらふの山も守る人しげからんに、わりなく通はん心の色こそ、浅からず㉙哀と思ふふしへの、忘れがたきことも多からめ。【後略】

特に第1部においては、「あはれ」は、ア「あはれ」が章段全体の主題になっている、イ冒頭部か末尾部に現れる、という傾向は指摘できそうである。しかし、それらは、これを一見しただけでは『徒然草』のみにおける特別の用法であるとか特殊な表現であるというようにも見られない。そこで次に『枕草子』の用例を分析し、それと『徒然草』とを比較してみることにする。

3 『枕草子』の「あはれ」の使われ方

3-1 「こそ～あはれ+なれ」の中古表現らしさ

『枕草子』の名詞「あはれ」は83例、そのうち「なり」を伴ういわゆる形容動詞的用法76例、その76例のうち係り助詞と呼応している例が15例である。係り結びと呼応した割合は、係り結び用法が盛んであった中古の『枕草子』でも76例中15例の19.7%程度にすぎず、『徒然草』の方が50.0%と倍以上になっていて、圧倒的に多い（【表1】

参照)。係り結びが総体的に衰退している時期の『徒然草』の方がかえって、“盛んだった中古的に” 強調されている、というようにも見えることになる。

延べ語数 『徒然草』 17110 語 『枕草子』 32904 語

異なり語数 『徒然草』 4240 語 『枕草子』 5246 語

見方を変えると、係り結びが衰退している時代である筈の『徒然草』の方が、「あはれ」+「なり」と係り結びとの共起はむしろ強くなっており、ある種のパターン化しているのが『徒然草』第1部の傾向のようにも見える。

そのような点は「あはれ」の使用そのものでもうかがえる。後述するように、中世の日記・随筆を見ると、「あはれ」の使用は決して多くはない。『徒然草』の「あはれ」31例は、実数では『枕草子』84例のおよ半数弱(約40%)ではあるが、延べ語数比率から2倍して見ればそのほぼ同数に近いほどに多用されているのである。『枕草子』以上に、如何にも中古的な係り助詞との盛んな呼応を“見せて”いるように思われる。

つまり、いかにも中古らしい「こそ～あはれ+なれ」のような表現が特に第1部の「あはれ」では多用され、用例数的に中古作品の『枕草子』とは一見逆転しているかというほどに、強調されたような現れ方になっているのである。それは、どのように位置づけたらよいであろうか。それを考察するために、次の4節にて『徒然草』での用法を詳しく検討することにしたい。それとの比較のために、以下に『枕草子』の例(章段末尾部にある「こそ」と呼応する3例)を挙げておくことにする。

○【三】1例(末尾、「こそ」と呼応)

正月一日は、まいて空のけしきもうらうらと、めづらしうかすみこめたるに、世にありとある人は、みなすがたかたち心ことにつくろひ、君をも我をもいはひなどしたる、さまことにをかし。

(中略)

「よきに奏し給へ、啓し給へ」などいひても、得たるはいとよし、得ずなりぬるこそいとあはれなれ。
——『枕草子』「正月一日は」

○【九】2例(末尾にもあり、「こそ」と呼応)

うへにさぶらふ御猫は、かうぶりにて命婦のおとどとて、いみじうをかしければかしづかせ給ふが、はしにいでてふしたるに、乳母の馬の命婦、「あなまさなや。

(中略)

死にけむこそあはれなれ。

(中略)

なほあはれがられてふるひなき出でたりしこそ、よに知らずをかしくあはれなりしか。人などこそ人にははれて泣きなどはすれ。 ——『枕草子』「上にさぶさふ御猫は」

○【三五】1例（末尾部、「こそ」と呼応）

小白河といふ所は、小一條の大將殿の御家ぞかし。そこにて上達部、結縁の八講し給ふ。

（中略）

さて、その二十日あまりに、中納言、法師になり給ひにしこそあはれなりしか。櫻などちりぬるも、なほ世のつねなりや。

「おくをまつまの」とだにいふべくもあらぬ御ありさまにこそみえ給ひしか。

——『枕草子』「小白河といふ所は」

4 『徒然草』の第1部・第2部の「あはれ」の対象と用法

4-1 第1部・第2部の「あはれ」の対象と用法

『徒然草』での「あはれ」の使い方を、第1部と第2部とを比較しながらもう少し詳しく検討してみることにしたい。

【表4】は、『徒然草』における「あはれ」の対象を示したものである。第1部では、四季折々の風物や情景、年中行事、文書、詩などに頻繁に「あはれ」が用いられている。あえて言えばおよそ『枕草子』あるいは中古作品でも類似用例が探せそうな、また、いかにも「あはれ」の典型的用例で辞書類での用例にも挙がっていそうな用法である。例えば、次のようなものである。

○【第十九段】

（前略）かくて明ゆく空の氣色、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞする。

大路のさま、松立わたして、花やかにうれしげなるこそ、また^⑬あはれなれ。

○【第二十一段】

萬のことは、月見るにこそ、慰むものなれ。

ある人の、「月ばかり面白ものはあらじ」と言ひしに、またひとり、「露こそ^⑭あはれなれ」とあらそひしこそ、をかしけれ。

折にふれば、何かは^⑮あはれならざらん。月・花はさらなり、風のみこそ、人に心はつくめれ。

岩にくだけで清く流るゝ水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。「沅・湘日夜東に流去る。愁人の為にとゞまること少時もせず」といへる詩を見侍しこそ、^⑯哀なりしか。（後略）

【表4】『徒然草』の第1部・第2部の「あはれ」の対象

章段	通番号	対 象	章段	通番号	対 象
11	①	山中の庵と主人の関係	25	⑰	物事が移り変わる様
13	②	文章や書物		⑱	あざやかに残っている屏風、額
	③	文章や書物	26	⑲	言葉
14	④	言外の情趣	28	⑳	諒闇の年
	⑤	情趣	29	㉑	人から貰った便り
	⑥	梁塵秘抄の郢曲の言葉	30	㉒	
19	⑦	季節の移り変わり		㉓	墓に生える春の草々
	⑧	四季折々の風物	32	㉔	庭の雰囲気と声
	⑨	四季折々の風物	44	㉕	人の行い
	⑩	四季折々の風物	125	㉖	いつもより尊い説法
	⑪	年中行事	137	㉗	自然
	⑫	行事を行っている事		㉘	月の有様
	⑬	都大路の様子		㉙	盛んな物が終わりゆく様
21	⑭	露	142	㉚	ものの情趣
	⑮	その折々にふさわしいもの	240	㉛	折々の忘れられないこと
	⑯	世捨て人の詩			

4-2 第2部の「あはれ」の特徴

その一方で、第2部では、第1部と類似はしているが、やや異なった対象と用法が見られるように思われる。「あはれ」の対象物が具体的な第1部と比べて、第2部ではやや抽象的になる傾向がみられる。

第1部の「あはれ」の対象物は、文選(第十三段)、庭の景色や匂い、声(第三十二段)、年中行事(第十九段)等、本文中に明確に示される事物に対して表現されている例がほとんどである。

一方、第2部での対象物は、個々の事物というより「人間としての情感・人への情愛」(第四百十二段「子故にこそ、萬の㉚あはれは思ひ知らるれ」)や、そのしみじみとした場面から感じ取れる情感(第四十四段「㉕哀と聞知るべき人もあらじと」)など、やや範囲や受け取れる情趣・情感の世界が幅広い対象に使用されているように思われる。

また、「あはれ」の対象物と章段の内容との関係も、第1部と第2部とは異なっているように見える。第1部では、「あはれ」の対象物や、それに付随する事物がその章段での主題となっていることが多い。つまり「あはれ」は主題の一部とも言える。

それに対して、第2部では、章段の主題は「あはれ」の対象物とは別のものにある。美しい景物や心に感じ入った出来事を礼賛する第1部とは異なる卑近な出来事（第二百五段、第四百二段）や、優美な貴族の世界（第四十四段）であるように、「あはれ」の対象物そのものとは内容が離れている。例えば、第二百五段は前後二つの逸話ともその中の物の言い方の面白さに焦点があり（最初の話では「さる導師のほめやうやはあるべき。）、「㊟あはれも醒めてをかしかりけり。」の「あはれ」には章段の焦点はなく、「をかしかりけり」の「をかし」が主題とも言えよう。

総合的にみると、「あはれ」の対象物が第1部と比べて抽象的であり、また対象は章段の主題からは離れた別のものになっているのが第2部の傾向である。以下、そのことをもう少し具体的に、第四十四段、第二百五段、第四百二段について順次みていくことにする。

4-3 第2部の用法の検討

まず第四十四段の「あはれ」から見ていく。

○【第四十四段】

あやしの竹の編戸のうちより、いと若き男の、月影に色あひさだかならねど、つやゝかなる狩衣に、濃き、指貫、いと故づきたるさまにて、さゝやかなる童ひとり
を具して、遥なる田の中の細道を、稻葉の露にそぼちつゝ、分行ほど、笛をえならず
吹きすさびたる、㊟哀と聞知るべき人もあらじと思ふに、行かん方知らまほしくて、
見送りつゝ、行ば、笛を吹止みて、山のきはに惣門のあるうちに入ぬ。

これは、男の様子や周囲の説明を述べ、その場における行動と全体の雰囲気に対して「あはれ」が用いられている。特定の人物の行動や特定の場所に対して「あはれ」が用いられている例はこの段のみであり、他の段には見られない。

次に第二百五段を見ていく。

○【第二百五段】

人におくれて、四十九日の佛事に、或聖を請じ侍しに、説法いみじくして、皆人、涙を流しけり。

導師歸て後、聴聞の人ども、「いつよりも、ことに今日は尊く覺え侍りつる」と感じ合へりし返事に、或者の云、「何とも候へ、あれほど唐の狗に似候なんうへは」と言ひたりしに、㊟あはれも醒めてをかしかりけり。

これは四十九日の仏事にて素晴らしい説法を聞き感じ入っていたのに、筋違いな事を

言う者がいた為にしみじみとした気持ちも冷めてしまったという文章である。本文中の「あはれ」の殆どが、しみじみとした情感が感じられる事物に対して使用されている一方で、第百二十五段の「あはれ」は、「醒めて」を伴い、マイナスの表現をするために用いられている。このような使用の例も他の章段にはない。

次に第百四十二段の「あはれ」について見てみる。以下は第百四十二段、冒頭四文の引用である。

○【第百四十二段】

心なしと見ゆる者も、よき一言いふものなり。

ある荒夷の恐しげなるが、かたへにあひて、「御子はおはすや」と問ひしに、「一人も持ち侍らず」と答しかば、「さては、ものの哀は知り給はじ。

情なき御心にぞものし給らんと、いと恐し。

子故にこそ、萬のあはれは思ひ知るれ」と言ひたりし、さもありぬべき事なり。

簡略に内容を述べると、「子どもがあるからこそ、萬のあはれも理解できるのである。」といった内容である。この段の「あはれ」が対象とするものは本文中にはなく、ものの情趣といったような「あはれ」そのものの漠然とした意味で用いられている。この例は第1部に見られないわけではないが、「あはれ」が複数使用されているうちのひとつにすぎず、章段内において単独で用いられているのはこの例のみである。

また、第2部の中で「あはれ」の使用数が多い第百三十七段についてだが、橘純一(1974)による『徒然草』の章段内容分類案によれば、第百三十七段は、前半部分は「自然について述べたもの」、後半部分は「無常について述べたもの」とされており、第百三十七段の「あはれ」3例は、全て前半部分で用いられている。また、同分類内において、「自然について述べたもの」に分類されるほかの章段は、第十九、二十、二十二、二百十二段であり、第1部の章段が多い。第2部の中で、第百三十七段の「あはれ」の使用数が多いのは、その前半部分が第1部的な内容であるためである。

最後に第二百四十段の「あはれ」についてであるが、章段の内容は、特に第1部的といった特徴は見られず、「あはれ」の対象物や使用法についても特徴的なものは見られなかった。

5 中世作品の「あはれ」と係り助詞との呼応

前節で『枕草子』と比較した結果、『徒然草』の特に第1部に多かった係り助詞との呼応用法「係り助詞～あはれ+なれ」は、中世の用法そのもの、というよりは、連語的表現としてパターン化している一つの形式の可能性があることを見た。いかにも中古的な表現であるかのように強調された作為的形式のようであり、いわば中古的用法に擬し

【表5】 中世資料（文学作品）における「あはれ」とその係り助詞との呼応例数

資料	およその成立年	「あはれ」用例数 （*索引に従う）	係り助詞 との呼応	係り助詞との 呼応（内訳）	使用索引
唐物語	12世紀後半	15（4名詞、1感動、10形動）	0		池田利夫『唐物語校本及び総索引』
無名草子	1196～1202	95（5名詞、2感動）	（未調査）		坂詰『無名草子総索引』
松浦宮物語	1207頃	34（16名詞、18形動）	0		菅根『松浦宮物語総索引』
方丈記	1212?	1（1形動）	0		青木侂子『広本略本方丈記総索引』
たまきはる（健寿御善日記）	1219	7（7形動）	0	（や～なれ）	鈴木・鈴木『たまきはる（健御前の記）総索引』
住吉物語	1221頃？鎌倉初期	58（16名詞＝語幹、10感動、32形動）	1	（こそ～あはれなれ）	国語学懇話会『明日香井家本住吉物語翻刻と総索引』
閑居友	1222	65（8名詞、11感動、46形動）	0		峰岸ほか『閑居友本文及び総索引』
海道記	1223	23（5名詞、3感動、15形動）	2	（2/15形動＝13%）	江口『海道記語彙及び漢字索引』
東関紀行	1242	24（5名詞、19形動）	1	（こそ～あはれなれ）	熊本女子大学国語学研究室『東関紀行本文及び総索引』
石清水物語	1247～1271頃	（未調査）			
弁侍日記	1252以降	3（3形動）	0		WEB本文での検索
うたたね		12（7名詞、5形動）	0		次田・酒井『うた、ね本文および索引』
十六夜日記	1280頃	18（1名詞、17形動）	0		江口『十六夜日記校本及び総索引』
なよ竹物語（鳴門中将物語）	1272以後近く	0	0		平林文雄『なよ竹物語研究並に総索引』
中務侍日記	1292以降	36（8名詞、1動詞、27形動）	0		小久保・若林『彰考館本『中務侍日記』総索引』
とはずがたり	1306直後1313頃迄	（未調査）			
徒然草	1330頃	31（9名、22形動）	9		時枝『徒然草総索引』
竹むきが記	1349	29（5名詞、2感動、22形動）	0		渡辺・市井『竹むきが記総索引』
こわたの時雨		57（22名詞、1感動、34形動）	0		大槻修ほか『甲南女子大本こわたの時雨本文と索引』
山路の露	1271年（文永8年）以後～応永以前説あり	42（16名詞、26形動＝概数）	0		山内洋一郎『源氏物語外篇山路の露本文と総索引』
歎異抄	鎌倉後期	1（1形動）	0		山田巖・木村晟『歎異抄本文と索引』

* 「あはれさ」「あはれむ」「ものあはれ」などは原則除外

た「擬古的表現」のようにも思われた。

そのことを別の角度から検証するために、中世の『徒然草』前後の他の資料における「あはれ」の用法と比較してみることにしたい。比較する上では、軍記物語や説話集よりも文体的にも内容的にも『徒然草』に近いジャンルの方が良いので、随筆・物語・日記作品を見てみることにする（『徒然草』には説話集の表現の影響も指摘されているが今回は内容的な面から説話集は除外した）。次の【表5】が比較した資料と「あはれ」の総用例数である（名詞、形容動詞、副詞、感動詞などの用法を総合する）。

【表5】を見て明らかのように、「あはれ」の用例そのものは衰退せずにほぼ出現している。しかし、係り助詞と呼応する用法は、『徒然草』の100年前からほとんど皆無と言ってよいほどだったことがわかる。

「ぞ」や「こそ」の係り助詞自体も衰退や縮小をしている時代にあつて、それらをあえて持ち出して使っている『徒然草』での「あはれ」の係り助詞と呼応表現、「こそ～あはれ+なれ」「ぞ～あはれ+なる」は中世での表現というよりも、中古らしさを演出する効果があつたのではないだろうか。中古的用法としていわば「擬古的表現」とみなしておくことができるように思われるのである。むしろ第2部の用法が、中世的なもので作者の同時代的用法のようにも思われた。

6 まとめ——『徒然草』における「あはれ」の擬古文的用法

『徒然草』の「あはれ」の用法を『枕草子』と比較し、ついで、中世の和文作品とも比較してみた。

『徒然草』では「あはれ」が係り助詞と呼応する用例が特に第1部で多く、第2部ではなぜか少なかった。また、第1部での「あはれ」は特に章段の主題に関わって使われているか、主題になっている対象に対して使われていることがほとんどであったが、第2部では必ずしもそうではなかった。第1部でのやや中古的に強調された用法は、中世の資料ではほとんど見られないものであった。

それらを総合すると、『徒然草』での「あはれ」の係り助詞との呼応表現、「こそ～あはれ+なれ」「ぞ～あはれ+なる」は、中世での表現というよりは、「擬古的用法」と

【表6-1】『徒然草』の「をかし」の章段別用例数

章段数	をかし
1	1
3	1
10	1
12	1
14	2
15	3
19	3
21	1
22	1
23	2
24	2
31	1
56	1
102	1
104	1
105	1
125	2
137	3
139	3
175	4
191	1
209	1
231	3

【表6-2】『徒然草』の「をかし」の分布章段と係り助詞

1	3	10	12	14	14	15	15
こそ	こそ	こそ		こそ	ぞ	こそ	こそ
けれ	けれ			なれ	なし	けれ	見ゆれ
15	19	19	19	21	22	23	23
		こそ	こそ	こそ	こそ		こそ
		けれ	けれ	けれ	見ゆれ		けれ
24	24	31	56	102	104	105	125
		こそ	ぞ			こそ	
		しか	べき			けれ	
125	137	137	137	139	139	139	175
	こそ	こそ					
	けれ	けれ					
175	175	175	191	209	231	231	231
			こそ				
			けれ				

みなせるように思われた。第2部の用法がむしろ中世的なものなのではないかと思われた。

『徒然草』の擬古の文体をあぶり出し、抽出するのは、先行研究を見渡しても、必ずしも容易ではないようであった。本稿のように、その連語的表現に着目し、また、第1部・第2部での相違にも着目し、さらに、中古および中世の他作品とも比較しつつ、一つひとつ地道に探りながら、作者の手法の特徴を見つけ出していくのが、遠回りながらも手堅い近道でもあるように思われた。

『徒然草』では、「あはれ」と比較して、「をかし」は前半部にそこまで集中しているわけではないが、「あはれ」同様、「をかし」も、係り結びとの連動する割合は前半部のほうが高い。

後半部で「をかし」と係り結びが連動する例は、第五十六段1例、第百五段1例、第百三十七段2例、第百九十一段1例と5例にすぎず、そのうち2例は前半部的内容である第百三十七段のものである。後半部では係り結びとの連動が弱まるという「あはれ」で見られた『徒然草』の特徴が「をかし」にも現れている。（【表6-1】、【表6-2】参照）

【参考文献】

以下は本稿で直接関わるもののみとした。『徒然草』の参考文献一覧は安部（2020.3）に詳しいので参照されたい。

安部清哉（2020.1）「連語から見た『徒然草』——連語型文末機能語と文体——」『シリーズ〈日本語の語彙3〉中世』朝倉書店

安部清哉（2020.3）「『徒然草』の章段内容と分類」『学習院大学文学部研究年報』66

安部清哉（2020.5）「連語から見た『徒然草』第1部・第2部——接続機能表現のプレ近代化と文体——」『論究日本近代語1』勉誠出版

安部清哉・川澄香奈（2020.5 予定）「『徒然草』の連語『覚えし』と文体」『学習院大学日本語日本文学』16

安部清哉・川口結（2020.5 予定）「『徒然草』の連語『さも』」『学習院大学教職課程研究年報』6

【付記1】 本稿は、『徒然草』の連語に関する安部清哉（2020.1）・同（2020.5 予定）の拙論と関連する。先行研究史や本テーマに関する研究課題に関しても記載してある。併せてご参照いただければ幸いである。

【付記2】 本稿は、2019年度学習院大学大学院の日本語学演習（安部清哉）のテーマと指導に沿ったものである。峰尾が「あはれ」の基本的初期調査を行い発表と指導を経て、全体を安部がまとめ直したものである。

【付記3】 本稿は、次の研究費による研究成果の一部である。日本学術振興会科学研究費2017-2019年度基盤研究C（基金）、課題番号：17K02785、代表：安部